優秀賞

相手を思いやることの大切さ

八王子市立第五中学校　2年　溝口　夏奈子

私は、一八三五グラムの未熟児で産まれた。双子だったということもあり、母のお腹の中で逆子となり、予定よりも二ヶ月も早く産まれてしまった。チューブをいっぱい付けられてＮＩＣＵで過ごした二ヶ月間は忘れられないと今でも母は言う。

そんな母と今では、すっかり健康な私はよく他愛も無い親子ゲンカをする。大体はあっという間に自然消滅するようなケンカだが一度だけ長引いたことがあり今でも私はその時のことを思い出すと胸が痛くなる。

部活動の試合のためにかなり早起きして母がお弁当を作ってくれた時のことだ。一生懸命母が作ってくれたお弁当を見て『昼食の時間は短いのだからこんなに沢山食べられる訳ないじゃん。全く何もわかってないな。』と捨て台詞を吐いてしまった。母は黙って小さいお弁当に作り直してくれた。私は試合の緊張感もあってイライラして、そのお弁当を奪い取るようにして家を出た。

その日の昼休みにそのお弁当を食べながら折角私のために一生懸命作ってくれた母に対してもう少し他の言い方をすれば良かったと後悔の念がわいた。

その後母と私はそのことについて触れることは無かったが、私はそのときから母に対して自分の感情を爆発させないで一呼吸おいてから話を進めるように決めた。小さく産まれた私が健康でいることが何よりも嬉しいと母は言う。お弁当はその表れだったのだと思う。

家族だから、母だからという理由だけで甘えや自分の感情に任せて言いたい放題ではいけないと悟った。もちろん、親に対しては時には自分の正直な気持ちをぶつけることは大切だがその根底に優しさと思いやりが必要だということを私は今は思う。

母がふと、あの時のあなたの言葉は気にしていないよと言った。それに対して私は「ありがとう」と言った。